

『生きよそして記憶せよ』のフォークロアの 宗教的ポドテキスト

安岡治子

はじめに

ワレンチン・ラスプーチンの『生きよそして記憶せよ』（75年）は、第二次世界大戦の末期、脱走して生まれ故郷の村へ戻って来た兵士と、その夫を置き続け、ついに入水自殺を遂げる若い農婦の悲劇である。

この作品は、一種の戦争文学であるが、敵軍との戦闘はほとんど描かれず、しかも主人公が脱走兵というのも現代のソ連文学としては異色である。(1) しかしこれは単なる戦争文学でもなければ、脱走兵の物語でもない。作者は、主人公はむしろ妻のナスチョーナであることを再三、インタビューなどで言及し、「善良で誠実で自己犠牲的なロシア女性の性格を描くことが、この作品の主眼だった」(2) と述べている。

批評家たちもこの点では誰もが一致しているが、これと全く対照的に、夫アンドレイについては、単なるエゴイストで同情の余地はまるでないというのが、ソ連の批評家たちに共通した捉え方である。(3)

ラスプーチンは終戦の年、少年時代に実際に自分の村で脱走兵が囚われ引き立てられて行くのを目撃して、子供ごろに強烈な印象があったことを述べている。(4) また初期の半自伝的短編『僕とジームカ』（66年）(5) には、父親が戦地で行方不明になり脱走の嫌疑をかけられたことを子供の立場から見て、いかに困惑させられたかが描かれている。

勿論、この『僕とジームカ』はラスプーチンの実際の経験を書いたものとは限らない。ただ作者が脱走兵のテーマを長い間暖めてきたことは確かである。さらに、ナスチョーナを通じてロシア女性の伝統的な美質を描くことが主眼であったことも事実であろう。しかし、これらが眼に見えるテキストであるのに対し、その背後には別のポドテキストが読みとれるように思われる。優れた作品は様々な要素が即応し合い、全体として一つの完結した芸術作品にまとめあげられたものであるから、様々な読み方が可能であろう。本稿はこの作品のフォークロアの、神話的、宗教的背景を明らかにすることによって、作品の多重的解释に何らかの手掛かりを求める試みである。

1

『生きよそして記憶せよ』に限らず、ラスプーチンの作品には概して、フォークロアの要素が多く見られることは、ソ連内外の多くの批評家の指摘を待つまでもなく明らかである。『生きよそして記憶せよ』では、特にその傾向が強い。

まず、文体に表れたフォークロアの要素として眼につくのは、syntactic

parallelism である。

не громко, ласково-бережно пролился ее  
смех (290) (6)

молодежь-холостежь шухарила (314)

так хотелось выйти опять до солнца  
одной-одинешеньке (388)

この他、韻を含んだ言い回し Отскочь, не морочь, я те-  
бя не знаю. (234)、属性を表す呼び名 Василиса Пре-  
мудрая (261)、Мишка-батрак (387)、昔話特有の語彙 как  
за мороженная (200)、леший (232) など例をあげればきりが無い。

また、ラスピーチンは、俗諺や民話を作者の地の文に引用することが多い。

Близко локоть, да не укусишь. (247)

как катился колобок, так пускай и  
катится (282)

さらに、民間信仰につながる様々な現象が、主人公の悲劇的結末を暗示する凶兆として描かれてもいる。たとえば、ナスチョーナは、姑が出征した息子が帰って来る日のためにとっておいたサーロを、夫の所へ持って行くのだが、жданкаに手をつけるとその待ち人は帰って来ないという迷信がある。また、新婚初夜にナスチョーナは突然喧ましい雄鶏の声に驚くが、フォークロアの世界では時ならぬ雄鶏の鳴き声は不吉の前兆である。(7)

長い間子供のできなかったアンドレイとナスチョーナが、戦地と故郷の村にそれぞれ遠く引き離されたまま同時に見る夢は、子供が出てきて夫婦の絆を象徴する印象的な場面であるが、これも民話の中にその原型を見ることができる。例えば民話『牛の子イワン』でも、子供に恵まれない王と王妃が同じ夢を見て、その中で子供を授かる啓示を受ける場面がある。(8) ナスチョーナは国家や社会に背いて懸命に夫を底うのだが、夫婦は一身同体という強烈な一体感は、結婚は神の定め божий суд であり、夫婦は「天命で定められた者 (суженые)」と呼ばれたロシア民衆の意識に基づいている。(9)

そもそもアンガラ河に隔てられた両岸に夫婦が暮らすという設定からして、民話や民謡の約束事が前提になっているわけだろう。ロシア民謡では河を渡るということが恋愛または結婚の象徴なのである。(10)

## 2

このように『生きよそして記憶せよ』は、作品全体がフォークロアの世界を再現しているように思われるが、ここにはさらに、キリスト教のイメージも色濃く感じさせ

るものがある。

何よりもこの作品で作者は、月日を示すのに、しばしば一般の太陽暦ではなく教会暦による正教の祝日で表している点である。「聖母祭のすぐ後」(248)とか、「降誕祭まで」(291)とか、「聖イリヤの日に」(367)といった具合であるが、これらはそれぞれ収穫や草刈り等の農村歳事と重なるため、ソヴェト期になってからも農民の季節感と切り離し難く結び付いているのであろう。

また、主人公の二人が、極限の困難な状況にあるとはいえ、実に頻繁に十字を切ったり祈りを唱えたりする。(211, 316) さらにナスチョーナは、罪の赦しに関して「神に赦されない罪はないし」(297)、「十人の敬けんな者より一人の悔い改めた者のほうが天国での喜びが大きい」(371)というキリスト教的倫理観の持ち主である。

ここでこの小説の主要なエピソードの幾つかが、教会暦の祝日や、古くからの民間の祭日とほぼ重なっていることを書き留めておきたい。

まず第一章の冒頭の部分で「主頭節の大寒(крещенские морозы)の頃」という言葉があり(199)、これによって脱走兵アンドレイが故郷のアタマノフカ村へ帰って来た時期が示されている。三月の中頃、出征兵士マクシムが初めて無事に帰還し、村じゅうは一足早い戦勝気分湧き立つ。丁度この時期は、ロシアでは伝統的に春を告げる雲雀 жаворонки が飛んで来る頃とされており、3月9日(グレゴリオ暦では22日)がжаворонкиの祝日に当たる。この日には雲雀をかたどって焼いた糖蜜パンを用意し、子供たちが野に出て春を迎える習慣がある。(11)マクシムは帰還のみやげに、村の子供たちに「押し型模様のついた糖蜜パン(пряник)」を配るのだが、(259) пряникにはふつう鳥や動物の模様がついている。マクシムの帰還は勝利の日が近いことを知らせるが、それが春の訪れを祝うжаворонкиのイメージと重なっていることは言うまでもない。

ナスチョーナがアンドレイに妊娠を告げるのは、その数日後だから三月下旬である。正教の聖母受胎告知祭 Благовещение Пресвятой Богородицы は、3月25日(グレゴリオ暦の4月7日)であるから多少ずれるが、狂喜したアンドレイが、「おまえはおれの聖母様だ! Богородица ты моя!」(273)と叫ぶことから、この祝日を意識して書かれているに違いない。

この年の復活祭はグレゴリオ暦の5月6日に当たり、偶然のことながら戦争が終わった5月9日に非常に近い。

最後に、妊娠が村の人たちにも発覚し、追いつめられたナスチョーナが、アンガラ河に飛び込んで自殺する日だが、これははっきりと時日が書かれているわけではない。ただ、五月中旬にアンドレイと会ったとき、あと一月ぐらひは皆に気付かれずにすむだろうという記述があり(352)、またナスチョーナの入水は初めて草刈りをする前日である。草刈りは、一般に六月から七月に行われるものであり、例えば『アンナ・カレーニナ』の中でレーヴィンが草刈りをするのは六月の初めだし(但しグレゴリオ暦に直せば 六月中旬)、『マトリョーナの家』にも「ペテロ祭(グレゴリオ暦の7

月12日)からイリヤ祭(グレゴリオ暦の8月2日)までの草刈り時」という表現がある(12)。以上のごとから考えて、ナスチョーナの入水の時期は六月中旬から下旬の頃と思われる。

さてこの時期は、復活祭から数えて五十日目の聖霊降臨祭 Троица (グレゴリオ暦の6月24日)と重なる。友達のナーチカに父親は誰かと問われて、ナスチョーナが出まかせに「聖霊よ」と答えたのも、(378)あながち偶然とも思えない。

実はこの聖霊降臨祭は、ロシア神話の中の一種のニンフ、ルサールカの祭りの日でもある。ルサールカは、自殺であれ事故であれ、溺死した若い娘と、水子及び洗礼を受ける前に亡くなった子供の生まれ変わりとされている。いろいろの説があるが、寒い間ルサールカは水中深い水晶の宮殿に住んでおり、ルサールカの祭りの季節に水面へ上がってくるのだという。(13)ナスチョーナが水に飛び込む寸前に「深い水底からまるで気味の悪い美しいお伽話の中から出て来るように何かがちらつく」(392)のを見たのは、まさにこのルサールカの水晶宮だったに違いない。

### 3

ところで、ここで主人公アンドレイの名前だが、これはギリシャ語の *andrei* = 勇敢な、男らしいという語源をもつが、それよりもロシア人にとってこの名前は、聖アンドレアとの連想が深い。聖アンドレアは十二使徒の中でもペテロと共に最初に召し出された使徒であるが、ロシアの伝説ではこのアンドレアがドニエプル河を遡って後にキエフとノヴゴロドになった地方を訪れたということになっている。この使徒は後に十字架につけられ殉教したが、ロシアではこの聖アンドレアの十字架は特に尊敬され、旧ロシア海軍の軍艦旗にもなったし、聖アンドレア勲章というものもあった。(14)要するにアンドレアはロシアに於けるキリスト教誕生に深くかかわっただけでなく、ロシアの守護聖人ともいえるべき存在なのである。

『生きよそして記憶せよ』の中で主人公にこの名前があたえられたのは、意義深いことで、あるいはアンドレイはロシアそのものを、そしてロシアの苦悩を象徴しているのかもしれない。

革命から第二次世界大戦終戦までの間、白軍と赤軍に分かれての内戦、強制的集団化による様々な衝突、四百万とも五百万ともいわれる犠牲者をだした大飢饉(15)、それに四年にわたる大戦と、ほとんど息つく間もなくロシアの農民に襲いかかった災難の数々を、ラスプーチンはこの作品で、直接描くのではなくアンドレイやナスチョーナの生いたちといった形で、ほんのエピソードとしてほのめかすだけに止めているが(16)、作品の底流にこうした農村の悲惨な歴史があることを、われわれは銘記しておかねばならない。

アンドレイがもう戻って来ることのできない、自分のものではなくなった故郷の大地を歩く場面は、『Последний срок』(75年)のリューシャの森の

散歩を思わせるものがある。(17)ここでは、アンドレイは、近代化、工業化の流れの中で農村を出て行き、故郷の大地から切り離された多くの人々を象徴しているようにも思われる。

題名の『生きよそして記憶せよ』というのは、こうしたすべての過去に眼を向け、憶えておかなければならないというのであろう。そして、アンドレイの罪について、ナスチョーナがそれは自分の罪でもあると思ったように、我々も過去の不幸に対して、自分にも罪はなかったのかと考えてみることを、作者は求めているのではないだろうか。勿論それだけではない。本稿ではほとんど触れることができなかったが、この作品ではじつはアンガラ河を中心にした自然もまた主人公の一つである。人間は歴史の流れの中に生きているだけではない、雄大なそして永久に繰り返される自然の一部でもある。生きているとはこういうことなのだと作者は作品全体を通して語りかけてくるのである。

#### 4

最後に一つ大きな疑問が残った。なぜナスチョーナはアンドレイの唯一の希望だったお腹の子を道連れに自殺しなければならなかったかということだ。作者も初めはアンドレイの自殺で小説を終わらせるつもりだったという。(18)これまでもラスプーチンは、先祖から受け継いだ血(р о д)を子孫に伝えてゆくのが人間の最大の務めだという考えを、ほとんどすべての作品で繰り返し訴えているのだから、なおさらナスチョーナがお腹の子とともに死ぬ結末は唐突に思われる。

これを、彼女がアンドレイに下した罰(19)とか、全く悲劇的な許し難い過ち(20)とか見做す人たちもいるが、アメリカの研究家ミケルソンは、夫を救おうとしたナスチョーナの最後の試みと捉えている。(21)私もこのように考えたいと思う。

アンドレイはナスチョーナの手を「救いの手 спасительная рука」と表現している箇所があるが(236)、ナスチョーナは、アンドレイにとって救い主であったはずだ。

ロシア人にとって「罪の贖い」は常に信心の重要なテーマであった。(22)ナスチョーナは夫の罪を自分の罪と考え、その贖いのために自分を犠牲にしたのだ。しかし果たして彼女は救い主となり得たか。入水の前に彼女は舅姑からも見捨てられ、村人たちからも追い詰められ、「恥ずかしい、何もかもが虚しい」(392)と思いながら死んで行く。彼女の死と共にあらゆる希望も消えてしまったかに見える。

ところが彼女の名前ナスチョーナは、正式にはアナスターシャであり、その語源はギリシャ語のAnastasis＝復活である。しかも彼女の死んだ日は、先にも書いたとおり聖霊降臨祭であり、その日は正教会では「復活祭の終わりの日」と称ばれて復活祭と一つながりに考えられている。(23)ナスチョーナは絶望と恥辱と苦悩の十字架の果てに復活し、聖霊の時代をもたらしたと考えるべきであろう。

ナスチョーナの遺体が上がった後、村の女たちが彼女を溺死者の墓地でなく村の墓

地に埋葬し、供養をして泣いたという最後の場面も、罪の赦しがなされたことを示している。

それは無論、アンドレイが実際に刑罰を免れるかどうかとは別次元の話である。だからこそ作者は、後の版ではアンドレイについての最後の記述を省いたのであろう。

(24) アンドレイすなわちロシアは、ナスチョーナのような女性によって救済され復活するはずだという期待をこめて……。

註(1) もっとも脱走兵を扱った作品としては、既に57年アイトマートフの『面と向かって』があるが、この作品では妻が脱走兵の夫を告発する。

(2) В. Распутин "Это становится традицией Вестн. Моск. ун-та #3 1977 с. 84

(3) Вл. Шапошников 『В. Распутин』 западно-сибирское книжное издательство Новосибирск с.41-53  
Н. Тендитник 『Ответственность таланта восточно-сибирское книжное издательство Иркутск с. 57-79 等参照

(4) В. Распутин "Быть самим собой" Вопр. лит. 1976 # с. 147

(5) В. Распутин "Мы с Димкой" 『Человек с этого света』  
Худ. лит. Красноярск 1967 所収

(6) В. Распутин 『Повести』 Молодая гвардия Москва 1976 をテキストとして使用する。以下三桁の( )内の数字はテキストのページを示す。

(7) А. Афанасьев 『Древо жизни』 Современник Москва 1982 с. 130

(8) 『Народные русские сказки』 Москва  
Худ. лит. 1979 с. 85

(9) Афанасьев 前掲書 с. 366

(10) 伊東一郎 「マーシャは川を渡れない」 現代ロシア語 1977 11 号 p. 8

(11) Афанасьев 前掲書 с. 434

(12) А. Солженицын 『Собрание сочинений』 т. 1  
Посев 1970 с. 206

(13) А. Афанасьев 『Поэтические воззрения славян на природу』 т. 3 с. 240-241

(14) Исуворский 『Россия и христианство』 中央出版社 1964 p. 11-14

(15) N. Уорс 『Россия и крестьянская жизнь』 平凡社 1986 p. 346

- (16) ナスチョーナは、父親を集団化の混乱の中で殺され、母親を1933年の飢饉で失っている。この飢饉の年ナスチョーナは十六歳だったというから、丁度革命の年1917年生まれということになる。アンドレイもまた、ものごころついて初めての記憶は、コルチャック軍にいた叔父が眼の前でパルチザンに捕まった光景であった。
- (17) リューシャの森の散歩に関しては拙稿“ワレンチン・ラスプーチンの『Последний срок』”ロシア語ロシア文学研究第19号所収参照
- (18) В. Распутин“Любовь к своему герою”  
Книжн. обозрение 1977, 4. 22 с. 22
- (19) С. Семенова『Валентин Распутин』Москва  
Сов. Россия 1987 с. 94
- (20) С. Залыгин“Повести Распутина” в книге  
『Повести Распутина』Молодая гвардия  
Москва 1976 с. 7
- (21) G. Mikkelsen “Religious Symbolism in  
Valentin Rasputin's Tale Live and  
Remember”『Studies in honor of Xenia  
Gasiorowska』Columbus 1983 pp. 172-187
- (22) ウオルコフキー 前掲書 p. 226
- (23) 同書 p. 284
- (24) 1978年以降 『Сов. Россия』版(1978), 『Лениздат』版  
(1982), 『Известия』版(1985)などすべての版でアンドレイについての最後の記述は省かれている。